
「額田寺伽藍並条里図」写真図版解説

永嶋正春

はじめに

ここでは、本研究報告に掲載した「額田寺伽藍並条里図」の写真図版（図版1～80）を対象として、それらの内容、内在する情報の意味合いについて解説する。

これら写真図版掲載の目的は、出来る限り多くの客観的情報を広く提示することにある。したがって、内容に立ち入った解釈的な記述は極力最小限に止め、識者の理解、解釈に必要なかつ有益であるべき情報を優先した。その意味では、凡例の範疇に収まるものとも言え、また一般的な図版解説とはやや異質な内容となっている。本趣旨を御理解の上、諸図版を有効に活用いただければ幸いである。

1 掲載図版の構成について

ここで対象とする図版1～80には、「額田寺伽藍並条里図」の原本（国宝、国立歴史民俗博物館所蔵）、復原複製本（国立歴史民俗博物館所蔵）、西岡本（東京大学史料編纂所寄託）の3資料を掲載した。その細目は図版目次に示したが、3資料についての配分は下記の通りである。

原本（歴博蔵） 図版1～41, 49～80

復原複製本（歴博蔵） 図版43～48

西岡本（史料編纂所寄託） 図版42

原本の図版構成は、

図版1 全体図（原色）

図版2～5 4分割図（原色）

図版6～41 各坪ごとの細部図（原寸・原色）

図版49～63 X線透過像（15分割図・単色）

図版64, 66, 68, 70 赤外線写真（4分割図・単色）

図版65, 67, 69, 71 青系フィルター使用の写真（4分割図・単色）

図版72～75 伽藍部分の全体図（原色・X線透過像・赤外線写真・青系フィルター使用の写真）

図版76～77 青系フィルター使用の細部写真（単色）

図版78～80 顕微鏡写真（原色）

復原複製本の図版構成は、

図版 43	原本相当部
図版 44～47	4分割図（原色）（原本図版2～5に対応）
図版 48	復原全体図

西岡本については、全体図（図版42・原色）を示した。

なおこれらの図版構成は、本共同研究参加者の意見を踏まえた上で、筆者の責任により行ったものである。

2 掲載図版の内容と意味合い

原色図版について

原本並びに復原複製本については、顕微鏡写真（図版78～80）を除き、本研究報告の刊行に合わせて新たに撮影し直した。また全体図、4分割図、坪ごとの原寸図については、表現された色調について極力原資料との照合を行い、可能な限り原資料の持つ微妙な色調変化を忠実に反映するよう努めた。したがって、麻布の細部色調・質感や、赤色・褐赤色系顔料のあり方などについては、ほぼ原資料に匹敵する情報を有するものと理解している。特に原本については、資料全面にわたる坪ごとの原寸写真をも掲載しており、その有用性は大きいものと考えている。

また、従来からの研究史を踏まえ、全体図ではあるが西岡本（図版42）も掲載した。

X線透過像（X線写真）について

本研究報告の刊行に合わせて、新たに原本に対するX線撮影をし直した。今回の撮影は、原本を縦方向に5分割、横方向に3分割した上で、四切フィルム1枚ごとに露光したものである。各フィルムの主要撮影範囲は、原本全体図（図版1）に示した通りであるが、各区分については、天側から順にA～E、向かって左方から順にI～Ⅲとすることで、その交点を表記している。

使用したX線装置はソフテックスK-2型、撮影距離を1mとし、歴博第3調査室を暗室状態にした上で、安全光下での撮影を行った。撮影電圧・電流は、25kV・4mA、撮影時間は1分半、撮影フィルムは、筆者がX線透過撮影用に常用している富士グラビアフィルム タイプN（GN-100）を使用し、現像は富士レンドール 20°C、5分で行った。出来る限り鮮鋭なX線像を確保するため、フィルムを遮光袋に入れることなく直接露光したのである。

掲載したX線像はこれらを印画紙に焼き付けたものであり、X線に不透過性が高い部分がより黒く表現されている。従って、たとえば鉛丹（四三酸化鉛を主とする赤橙色顔料）で描かれた堂塔伽藍などは、大変鮮明に捕捉されることになる。実際の資料は木綿布で裏打ちされており、X線像には全面にわたって綿布のX線画像が重なることとなるが、綿布の織り密度が本体の麻布よりだいぶ細かいため、X線画像観察上ではさほど支障になっていないのは幸いである。

赤外線写真について

原本の赤外線写真についても、新たに撮影をし直して掲載した。撮影は定法に依ったが、掲載図版は、その焼き付け分である。したがって当然ではあるが、墨書等はより黒く強調されているのに対し、赤色系顔料で描かれた伽藍の柱などは、地の麻布よりもむしろ白味を帯びて表現されている。

青系フィルター使用の写真について

富士 BPB45 フィルターを使用して、白黒ネガフィルムによる原本撮影を行った写真である。本撮影についても、報告書の刊行に合わせて改めて実施し直した。本撮影の主目的は、国印「大和国印」の在り方を捉えることにある。

本資料が製作された当時の国印の印影素材（顔料）は、ベンガラ系赤色顔料（ベンガラすなわち赤色酸化鉄、あるいはベンガラ類似の赤色土）であり、赤外線写真でその存在を強調するのは困難である。X線の透過性も比較的良好であるため、うっすらとした国印の存在をX線画像として捕捉するのもまた困難である。したがって、簡便に利用可能な光学的手法のなかで、国印の所在を強調できる方法を適用する必要があるわけである。

ところで上記のフィルターは、いわゆるバンドパスフィルターであり、印影素材に対してはどちらかと言えば補色関係になるような可視光領域のみを透過する特性を有している。すなわち、本フィルターを使用して原本の撮影を行えば、「大和国印」の所在が少なくとも肉眼で観察する以上には強調されることになる。

顕微鏡写真について

「額田寺伽藍並条里図」原本の微視的部分について詳細に観察し、併せて記録写真を撮影した。

主たる目的は、絵画的な手法と麻布の損壊状態とからその存在が予測される日本画顔料、すなわち岩緑青（孔雀石の粉末、塩基性炭酸銅）や白緑（素材は岩緑青に同じ、但し微粉末）について、その使用の有無や面的な広がりを確認することにある。これらの顔料は、肉眼的には全くその存在が認められず、また残存していたとしてもあまりに微量であるため、既述の手法によっても検出不可可能な状況である。

観察は、大型の架台に設置した金属顕微鏡に依った。資料保存上の制約から、現時点でも全面にわたる観察を継続中であるが、上記の岩緑青・白緑をはじめとする主要な問題点については、概ね実態の把握を終了している。掲載した図版はそのごく一部であるが、全面観察を終えた時点で、再度議論することとなる。

おわりに

以上、「額田寺伽藍並条里図」関係写真図版（図版1～80）を読み解く上で参考になる周辺情報を記述してみた。さらに内容に立ち入って議論を重ねるのが筆者の本来の役割であり、その点では、客観情報の提示は役割の責の一部を果たしたに過ぎないことになる。しかしながら、既述のような調査の結果をも踏まえた上で復原複製本が成立したのであり、その意味ではさらに幾分かの役割を果たし得たものと考えている。

補) 以上の解説に関連して、若干の捕捉を付け加えたので参照されたい。

(1) 掲載写真の撮影者は、次の通りである。

- 原本並びに復原複製本の全体図(原色)・4分割図(原色)、原本の赤外線写真、原本の青系フィルター使用写真(全体図、4分割図)

以上は、本館資料課 勝田 徹技官の撮影による。原版は4×5判フィルム。

- 各坪ごとの細部図(原色)、伽藍部分の全体図(除、赤外線写真)、青系フィルター使用の細部写真、X線透過像(X線写真)、顕微鏡写真

以上は、筆者の撮影である。顕微鏡写真は35mmフィルム、その他は、X線フィルムを除き全て6×7cm判フィルム。

(2) 以下に掲げた参考文献は、以上の図版並びに図版解説に関連した近年の出版物であるので、必要に応じ参照されたい。

参考文献

- 1) 『日本荘園絵図聚影三 近畿二』東京大学史料編纂所編、東京大学出版会、1988。
ここには、原本写真に加えX線写真・赤外線写真が分割で掲載されている。今回の図版はこの時に提供したものでなく、新たに撮影し直したものを使用している。
- 2) 拙稿「正倉院文書に使用された彩色料について」『正倉院文書拾遺』国立歴史民俗博物館編研究図録、1992。
正倉院外に所在する正倉院文書の理化学的顔料調査の結果を踏まえ、それらの文書に使用されている顔料について考察した。古代「国印」の押捺素材が、ベンガラあるいはベンガラ類似の赤色顔料であることについても論じている。
- 3) 拙稿「粉地彩絵八角几の彩色」『正倉院の木工』宮内庁正倉院事務所編、日本経済新聞社、1978。
奈良時代の絵画技法において使用された色材(顔料等)について、検討を加えている。絵図製作に用いられた顔料を、その背景からさぐる上で重要な知見となる。
- 4) 『荘園絵図とその世界』国立歴史民俗博物館企画展示図録、1993。
古瀬奈津子「額田寺伽藍並条里図」復原複製のできるまで、拙稿「額田寺伽藍並条里図」に見る古代の顔料」を所収しており、復原制作の過程や使用顔料についての知見が得られる。
- 5) 『日本古代荘園図』金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編、東京大学出版会、1996。
古代荘園図に関する論考が体系的に納められており、荘園図全般に対する知見が得られる。加えて、各論(山口英男「額田寺伽藍並条里図」)では、原本に関する網羅的な整理がなされている。

(国立歴史民俗博物館情報資料研究部)